



TITLE:

[第4章 アクターとしての研究者3]
アマゾンに住むシピボの食の「分
かちあい」と森林資源: 私は村人の
輪に入れたか？

AUTHOR(S):

大橋, 麻里子

CITATION:

大橋, 麻里子. [第4章 アクターとしての研究者3] アマゾンに住むシピボの食の「分かちあい」と森林資源: 私は村人の輪に入れたか?. CIAS discussion paper No.59: 森をめぐるコンソナンスとディソナンス --熱帯森林帯地域社会の比較研究 2016, 59: 68-73

ISSUE DATE:

2016-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228657>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

アマゾンに住むシピボの食の「分かちあい」と森林資源 私は村人の輪に入れたか？

大橋 麻里子

一橋大学大学院社会学研究科／日本学術振興会特別研究員(PD)

はじめに

アマゾン。それは今でも世界で唯一、「文明」非接触集団がいるとされる世界最大の森である。とはいえ、その森に暮らしてきたその他多くの人びとは「原始的」で「閉じた」世界に住んできたわけではなく、さまざまな外部者と接触してきた。近年、熱帯林をめぐる「生物多様性」維持に向けた遺伝資源や「気候変動」対策のための二酸化炭素吸収源として、自然科学系の研究者や開発援助機関、NGO、行政といった外部者によってその「保全」や「保護」が目指されている。もちろん、アマゾンも例外ではなく、そうしたグローバルな課題を掲げて導入される「保全」や「保護」は、必ずと言ってよいほどに「住民主体」を称して、在来のやり方で資源を利用しながら森林を維持していくことが、開発現場では目指されている。ペルーアマゾンは、企業に資源を搾取されないよう「住民主体」で木材生産を行うプロジェクトが導入され、森林の「持続性」と先住民の「貧困」解決の実現が期待されている地域である。

本稿の主役は、こうした動きの最中にあるペルーのウカヤリ川流域(アマゾン川の源流のひとつ)に居住するシピボ(Shipibo)である。シピボはこの地域に居住する民族集団としては、1960年代ともっとも早い時期から外部社会との接触を急速に進め(Hern 1992)、積極的に西洋文化を取り入れてきた人びとである。そして、食材や食事を他者と分けあう(分かちあう)食物分配を行ってきた。私自身がシピボの村で調査をするのを決めたことの原因としては、実はこの点が大きく、それには個人的な思い入れが関係している。

私は幼稚園に入る頃から集合住宅で育った。引っ越し前の住居では、ご近所さんが時折食べ物のおすそわけを持ってきてくれたが、その後、集合住宅に住み始めてからは、そうしたやりとりは一切なくなった。そのことを憂い、私は食を介したやりとりに飢えていた

のだった。

私は2008年11月から断続的にシピボの集落に滞在してきた。村のなかでは、バナナや魚を持って互いの家を行き来する女性や子どもの姿にうっとりする毎日を送りながら、食事のことを調べることにした。それは単に自分の好奇心を満足させるためだけでなく、彼ら彼女らの生活にとっては食をめぐるやりとりが生活基盤として重要であることを、直感的に感じたからでもある。

開拓当時(1970年代後半)の村の様子を知る年配の男性であるエドゥコを、私はよく訪問した。あるとき彼は言った。「プカルパ市(村人がよくいくペルーアマゾン地域で2番目に大きい街)ではさ、メスティソ(混血の人)は自分たちだけが食べている。その横をとってもだれも『食べにおいで』とは言わない」。日本であれば、町の食堂で食べているときにかぎらず、農山村地域であったとしても、自宅の食事中に家の前をとおりがかった見ず知らずの人を食事に招待するだろうか。せいぜい、自宅に遊びに来ていた友人が食事の時間までいたので、「食べていきなよ」と誘う程度であろう。彼はさらにつづけた。「メスティソは(食べ物)を売る。お金で買わなければプカルパ市では食べられない」。なるほど、村に暮らすシピボの人にとっては、見ず知らずの人でも無償で食事に招待することは当たり前のようである。

エドゥコは別の日には、「オレ以外のだれが、マリ(筆者のこと)を食べるのに招待したことある？」と聞いてきた。私は「村の中を歩いていたら、みな『一緒に食べよう』と声をかけてくれる」と言った。彼は黙っていた。そして、彼の視線が宙を浮いているのを見るかぎりでは、私の解答はどうやら彼が望んでいたものではなかったようだった。そこで私は「でもまあ、『明日の朝に食べにおいで』というように、通りがかったときではなく事前に食事に招待してくれるのはノエミ(エドゥコの孫)だけかなあ」とつづけた。彼の表情は一瞬で明るくなり「そうだよ、事前に招待している

かということだよ。(招待をしているのはノエミだけなのは) そうだろう。マリは家に帰ってから親にだれがどれくらい招待してくれたかを話す? よく考えてみなさい」。

シビボの社会では、以前に比べると招待したくてもできない状況が生じている。なぜならば、とくに魚については、1988年の商業漁業船の操業を機に食資源が減少したからである。以前はコロソマ(*Colossoma macropomum*)を弓で獲って食べていたと昔を思い返して話す村人が、その魚の大きさを表わすときの手の幅は、少なくとも40センチメートルはある。1、2匹を獲ってくれば、それで一世帯の朝食は十分に確保できたという。そうした時代を知る人びとは、今獲れる小さな魚を「骨ばかりの魚(xae piti)」と呼ぶ。

エドッコのように「だれがもっとも招待したか?」といった確認作業を筆者にする人物はそういないが、「だれが自分を招待したか/しなかったか」といったことは、村人同士のあいだで時折話題にあがり、人間関係が良くなるか悪くなるかはそれ次第という部分が少なからずはあるのだ。すなわち、食の「分かちあい」は、アマゾン熱帯林に住むシビボの人びとにとっては重要な社会的営為なのである。そしてそこは、私自身が羨望しつつ食べた食を介したやりとりが、息づいている場所でもあった。

1. シビボの食物分配と排除される調査者

小集団の食をめぐる規範や慣習は、食物分配としてアフリカのコンゴ盆地の熱帯林やカラハリ砂漠に住む狩猟採集民を例にして、西洋的所有権の有無や平等主義の観点から議論されてきた。それについては、日本人研究者がその議論の中心的存在ともなっていて膨大な研究蓄積がある(たとえば北西1997, 2004; 竹内 2001)。そのため、ここで改めてその説明をすることはしない。ただひとつだけ付け加えておくと、食物分配の議論が活発に行われるなかでも、南米アマゾンに住む「先住民」は議論の理論的發展において中心的事例となることはほとんどなかった。ただし、アマゾンの氾濫原に住むシビボは、日常的に食物分配をしていて、1970年後半にはC・バーンズが生態人類学的に調査をした研究成果がある(Behrens 1986; 1992)。

筆者はこれまでに、シビボが半定住から定住に移行し地域内外の影響をうけるなかでの食物分配の変容について、複数の食材(バナナ、魚、ブッシュミート)の

分配に着目し、それらの分配をめぐる村人間での探りあいが資源別に特性が異なることを示した(Ohashi 2015)。そして、その在来の慣習に、冒頭でふれたような森林の「持続性」や「保全」といったグローバルな言説のもとに先住民社会へ介入を試みる外部者が、実際にどう組み込まれて(あるいは排除されて)いるのかに注目することが、地域社会と外部者の関係性を考慮するうえで重要ではないかと指摘した(Ohashi 2015)。本稿では、まずは研究と称して調査を行う外部者である私自身に対して、みながどう対応しているのかに注目してみようと思う。

2. ペルーアマゾンのシビボ

2-1 シビボと調査地概要

シビボが住むのはアマゾン熱帯林のなかでも、雨季の氾濫によって肥沃な堆積物が流れてくる氾濫原であり、土地の生産性が高い場所である。調査地域の気候は、雨季(5~9月)と乾季(10~4月)に分かれていて、降水量は年によって変動がするがウカヤリ川の雨季と乾季の水位差は4メートル以上にもなる。シビボは言語集団パノ(Pano)系であり、ウカヤリ川地域で約3万人と人口の多い先住民のひとつである。焼畑農耕によってバナナとプランテイン(*musa. spp*, 以下総じてバナナ)やスウィート・キャッサバ(*Manihot esculenta*)を栽培しつつ、漁労・狩猟・採集を行っている。姉妹型の妻方居住の一夫多妻制であったが、今では核家族が一般的である(Hern 1992)。ペルーでは、1974年にJ・ベラスコ(Juan Velasco)政権によって先住民コミュニティ制度が導入されていて、それはキリスト教普及の拠点地や自然村を中心としてその周辺に境界を設定して、土地の所有権を国家から先住民に付与するものであった。本稿で対象とするのはドス・デ・マジヨ先住民コミュニティ(Comunidad Nativa de Dos de Mayo, 以下ドス・デ・マジヨ村)である。村は、1977年に開拓され、1984年に先住民コミュニティに認定された。村の人口は約100人、16世帯(2015年4月現在)である。市場のあるプカルパ市までのアクセスは、乗り合い船と丸木船を用いて、(季節によっても異なるが)およそ18時間から24時間で着く。村人は現金収入を得るためにトウモロコシの生産・販売や木材伐採を行っていて、時々都市まで出かけては農作物や動植物、木材を売り、日用品を購入して戻ってくる。また、近年では出稼ぎも盛んである。2006年以降、先

住民の「貧困」削減を掲げた「住民主体」で行う木材生産プロジェクトが、政府直属の研究所によって導入されている。

2-2 資源をめぐる権利関係

食の分配にかんして報告するならば、最初にシピボの資源をめぐる権利関係（権利意識）にふれておく必要があるだろう。これらのことを一概に言ってしまうのは、本質主義的な見方との批判も受けかねないと思われるが、日本語のそれとは大きく異なる以上、簡単にでもその説明は必須であろう。

シピボ語で「所有」に近い概念を表す言葉は「物の名称+ヤ(ya)」である。これは自分がその物とともにある、ないしはそれを「持つ」状態を指す。また同時に「所有者」を示す明確な単語が存在しており、これをイボ(ibo)という。「所有者」が明確なものが「どの程度他者に利用が開かれているか」は、資源の特性やその資源が置かれている状況によって大きく異なっている。もちろん、それは所有者がその利用をも独占できるとする西洋的「所有」概念とは異なるものの、基本的に物を利用するときには「所有者」の許可を得ることが望ましいとされている。

在来の資源が豊富にあるときには、自主的に「『持たざる』者にそれを分配しなきゃ」となる。「持たざる」者に自分が豊富に「持つ」物を「分け与えてほしい」と頼まれたときに出し惜しみをして提供を拒むと「ケチ(yoashi)」と非難されたりする。「ケチ」は、「握って離さない固い手(moken chorish)」と説明される。この言葉を直接本人に対して言ってもいいかどうかはその二者間の関係性や状況による。ただし、「持つ」者がもともとひとつしか持っておらず、他者に与えることによって「持たざる」者になってしまう場合においては、それを拒否しても非難はされない。シピボ語で「ケチ」の対義語は、否定の意味を表わす「マ(ma)」を語尾に付けて、直訳で「ケチではない／気がよい(yoashima)」となる。

2-3 日常的な食事

今日、村人が日常的に利用する在来の食材は、バナナ、キャッサバ、魚、ブッシュミートであり、その他にも購入品であるパスタやコメ（自給もあり）、政府からの支給品である魚の缶詰やマメ、それに加えて、採集によって得られた果実も食している。バナナはシピボにとってはカロリーベースでもっとも重要な食材で

ある(Bergman 1980)。魚の総称はシピボ語ではヤパ(yapa)と言われるが、村では「食事」と同一の言葉であるピティ(piti)と呼ばれる。つまりは「魚がない＝食事はない」ことになり、魚があるかないかで、食べたものが食事となるかただの腹ごしらえの間食に留まるかが決まるのである。ブッシュミートは、開拓当時の1970年代は日常的に食される材料であったとはいえ、獲得量が激減している。これらの食材の調理方法はいたってシンプルであり、主食であれば茹でるか、焼くのが基本となる。魚やブッシュミートは、水に塩（購入）を入れてスープにするか、網で焼く。それ以外にも、すりおろしたプランテインと煮込んだスープ（シピボの伝統的な料理といわれるもの）も作られる。

3. 食事の輪に入るまでの調査者

3-1 プロジェクトを持ち込む外部者の食事

村では木材生産プロジェクト（以下、プロジェクト）が導入されているとした。プロジェクトでは、月に一週間から10日程度、メスティソの森林経営エンジニア（以下、エンジニア）と専門学校卒のシピボの指導員が村を訪問していた。ここでは、自生種であるトンカビーンズ(*Dipteryx odorata*)といった海外輸出用樹種の伐採権を商業伐採企業などの外部者に売ることなく、住民自身での伐採・販売をすることが目指されていた。さらに国内市場向けの換金樹種であるボレイナ(*Guazuma crinita*)の植樹も指導された。プロジェクトからの支払いは、毎月差別化された労働に応じた給与形態であったが、それとはまた別にコメやパスタ、砂糖などの食料も支給されていた。配給される食料の分量は、ボレイナの植樹面積に応じた分量が設定されていた。

2008年11月、私は、このエンジニアに連れられて初めて村に入った。村を訪問する前にエンジニアは、私がどの世帯に滞在すると食べ物に困らずに過ごせるか、そして既製品の食料をどれだけ持ち込むべきかといったアドバイスを自分の経験をもとにしてくれた。エンジニアとシピボの指導員は、村ではプロジェクトの経費で購入したコメかパスタの両方（ときにはどちらか）に加えて卵や魚の缶詰を食べていた。それを食事の前に、居候先の世帯に渡して、その家の女性(女子)に調理してもらう代わりに、調理後のものはその世帯メンバーが食べられるようにしていた。そしてエンジニアの好意で、彼ら2人が村にいるときには、私もプ



写真1 住居で食べる女性と(プロジェクトで製作された)テーブルで食べる男性

プロジェクトの食べ物を食べた。

できあがった料理はそれぞれ個別に3つの皿に盛られ、プロジェクトで作った木材からできたテーブルの上に置かれていた。皿には湯がいたバナナが一本とコメとパスタに、付け合せの卵か缶詰などがのっていた。調理を担当する世帯の男性が獲ってきた魚が添えてあるときもあった。私はアマゾンの農山村に来てまで既製品のもの食べていることに違和感を覚えてもいたので、魚を食べられるだけでうれしかった。だが、大抵その魚はジャンビーナ(*Potamorhina altamazonia*)で、エンジニアはその魚は「骨が多いから嫌いだ」として食べなかった。この魚は、あまりみなあいだでは好まれず、市場価値も低い魚であることがのちにわかった。そもそも住民は、好きな種の魚を自分たちで食べて、私たちにはあまり好まないものを食事に出していたのであった。

プロジェクトのスタッフがプカルバ市へ帰ってからは、いよいよ、私がみなに食事に加わる本番が始まった。私はエンジニアを真似て、コメやパスタなどを居候先の女性に調理する前に毎回渡していた。だが、他の村人から「コメを持っていないか? 子どもに食べさせたい」などと言って、分けてくれるよう頼まれるようになっていた(これは今思うと、私が「ケチ」かどうかを試していた部分もあるだろう)。私はそのやりとりが面倒になってしまい、3日目にして持っていた食料の全部を居候先の世帯の長女に渡してしまった。それからは、そうして頼まれることがあれば、「ロイダ

(居候先世帯の長女)に聞いてみて」と言うようにした。私のこの態度は、実は「所有者」を自分ではない人物に置き換えて自分にはそれを分ける判断をする権利がないことを示すことで、物のやりとりを回避するものであった。

そしてのちにこうしたことは、村でもよく使われるテクニックのひとつであることがわかった。それに確信を得たのは、食べ物以外の他のことを通してであった。私は村の若い女性から「石鹸を貸してくれ」と頻繁に頼まれていて、居候先の三女に相談したら、『「これは(居候先の)お母さんのだから、お母さんに頼んで」と言うんだよ』と真剣に答えてくれたのだった。ただし、現金によってしか得られない既製品以外、つまりは在来的な食資源の場合は、その権利は基本的に世帯内のメンバーであれば、だれもが対応可能であるところか、むしろ対応しなければ「ケチ」と評されることも、またのちに学習することになった。

3-2 外部者への「おもてなし」

シピボは以前であれば、ヤシ科の植物の葉身から作った箒で地面を掃いた上に直接に座って食事をしたといい、そのときには男性と女性そして子どもは分かれて座り、3つの大きな円ができていたという。2009年には木材生産プロジェクトで製材機が導入されたために、その木材を使用してテーブルとベンチを作った家もあった。だが、テーブルにはせいぜい6人が座るのが精いっぱい、世帯のメンバーみなと一緒に

に食事できるわけもなく、テーブルで食べるのは男性で、女性は床に座って食べていた。以前に、ブカルパ市に在住する居候先の親族を訪問したときも、住居そのものは都会風のものだったが、食事のときには男女で分かれて、女性は床に座り、男性は椅子に座って食べていた。それはドス・デ・マジョ村で見る食事風景とは変わりがなく、食事の仕方の根本はそう簡単には揺ぐものではないのかもしれない、と思ったことがあった。

シピボは、現在では、既製品の皿を利用しているが、以前はチュンモ(chonmo)といわれる土器でできた食器を使用していた。現在は直径23センチメートル程度の既製品の皿を使っているが、それは明らかにひとりで食べることを前提としたサイズである。そのうちのひとつにはゆであがった主食(バナナあるいはキャッサバ)を、そしてもうひとつには魚のスープなどのおかず(あるいはメインディッシュ)を入れて、それらを男女、子ども別に囲む。

料理がスープである場合、器を手で抱えて飲むために周りの人はそのあいだ待つことになる。また、私の居候先の祖母は、自分の孫に対して「座って、しっかり足を開いて(あぐらの形)、少しずつ少しずつ手でつまみながら食べるんだよ」と言って説明をしていたし、みなが欲しがる種類の魚を独り占めしようとしてガッツリとその身を取ってしまう子どもに対しては、母が「自分だけが食べたいんだね!」と叱っていた。このように、他者と食べることを常に意識するし、小さいときからそのことを教え込まれる。ただ、幼児などで独占欲をコントロールできない年齢の子が自分の物欲しさに泣きわめくときは、その子の分を別の皿に取り分けることもあり、年齢に応じて食べ方のルールを教える時期も考慮されているのである。

プロジェクトスタッフが村から帰ったあと、私は居候先のメンバーと一緒に食事をするようになったが、それでもまだ家の女性の輪に入れてもらえたわけではなかった。私の分の食事は、家の父と長男の分とともにひとり分として用意されていた。家の男性にこのように料理を出すのは、魚を獲ってくるからである。(なお、自分の皿を与えられたら、その本人がよしとしないかぎり他の人が手を出すことはマナー違反である。)女性の私が男性に交じって食事をしている状況はシピボにとっては考えられないことであろうが、メスティソは食事をするさいにテーブルに座ってひとりひとつの皿で食べていることをみなは知っているがゆえ、それは私に対しての「おもてなし」でもあった。



写真2 魚を焼く、調理の様子

2013年の時には、プロジェクトスタッフと一緒に行っても、居候先では「これ(魚)をひとりでこっそり食べなさい。マリの分だけある」と言ってくれたり、刺し網で獲ってきた長男よりも良い魚をのせてくれたりした。こうしたことは、村に入り始めたころとは違って、居候先との家族との関係においてプロジェクトスタッフとは違う位置づけとなれたことを示しているといえるだろう。

私に出される料理が個別となるか、それともみなと一緒にになるかは、誰が食事を提供してくれるかに依るところが大きい。それ以外にも、食べている物やその世帯の食事に新たに参加したメンバーなどによって、その時々に応じて変わるし、そもそも家のなかでは他のメンバーもひとりがひとつの皿で食べることも増えてきた。こうして、料理の出され方はその時々で異なっていて、筆者が外部者(ゲスト)の扱いになるか、家族の一員の扱いになるかは、常に一定なのではなく状況に応じて変化している。

3-3 食事招待への呼びかけ

私は居候先で姉妹たちに「一緒に食べよう」と言っていた。そもそもシピボには、食事をしているときに、通りがかった人に対して「○○(名前か関係性)、フーマンピ(feman pi, 一緒に食べよう)」と声を掛ける慣習がある。現在では、相手を選んでいる様子があるものの、食べているときにそばに来た人には、相手がだれであったとしても、嫌々でも、欠かさず言う。

こうして特定のだれかを招待するのは別に、シピボ語にはそれを聞いた人ならばだれでも食べに行つてよいとされる招待の言葉がある。それが「ピーブツ

カンウー」である。これは不特定多数に対する「食べに
おいで」である。村人によると以前ならば、調理が終
わった女性が台所の外に出てあっちこっちを向きなが
ら大声で言っていたという。そして、みながそれぞれ
自分の料理を持ち寄ったという。世帯での消費分の獲
得が精いっぱいと言われる今、これはもう、よほどのこ
とがない限り聞かれなくなった、誘いの言葉である。

結語にかえて——人びとの試行錯誤

シビボ語でシェアリングはアッキンキン(aquinkin)
と言われる(Ohashi et al. 2011)。私が2008年11月か
ら2015年4月まで断続的に村に滞在するなかで、シビ
ボのアッキンキンは大きく変化してきた。そこには私
も含めて多くの外部者が関係しているが、そうしたな
かで私が果たしうる役割について考えてみたい。

これまでに何度か説明してきたエンジニアは、まじ
めに仕事をしている人物と評価してもよいだろう。彼
は対象社会でどのような慣習が重視されているのか
を理解している。しかし、これまでプロジェクトから
の支給品以外の食べ物を、彼が村人にあげたことはな
い。開発プロジェクトを導入するさい、このエンジニア
のように、ビジネスライクにのみ村人と付き合うの
ではなく、村人が実践・重視する態度を見せることが
彼らからの「信頼」を得るうえで重要であることは、す
でに散々に指摘されてきたことだろう。しかし、現地
出身の開発実践者であるエンジニアは、村の慣習から
距離をとるような態度をとっている。

その一方で、土地や資源の権利者となって以降、村
人が、許可なく伐採をしている出稼ぎ人や近隣村の住
民を取り締まろうとすると、相手から酒を奢られた
ならばそれで伐採を黙認することもあった。外部者か
らアッキンキンに通じる「気前のよい」態度を見せら
れると、人びとは森林へのアクセスを許してきた側面
があるのだ。仮に、皆伐をもくろむ企業が巧みにこの
慣習を用いたならば、アッキンキンの重視は、下手を
すれば人びとの生活資源を根こそぎ収奪されてしま
うことにつながりかねない。しかし、それだからといっ
て、「持続性」を理由に、彼らの社会で重視される規範
や価値観を頭ごなしに否定するべきではないだろう。

最近では村人たちも、外部者に対して、アッキンキ
ンに通じる態度だけではなく「資源が収奪されるかど
うか」といった指標も考慮するようになっている。森
林の「持続性」と村人が重視する「気前のよさ」とを成

り立たせるバランスは、おそらくそうした試行錯誤の
連続のなかで常に調整されるものなのではないか。筆
者はこれからも、村人の一時的な対応だけでなく、数
十年という長期にわたって、彼らの試行錯誤を定点観
測していきたい。

文献

a) 日本語論文

- 北西功一(1997)「狩猟採集民アカにおける食物分配
と居住集団」『アフリカ研究』51:1-28.
- 北西功一(2004)「狩猟採集社会における食物分配と
平等——コンゴ北東部アカ・ピグミーの事例か
ら」寺嶋秀明編『平等と不平等をめぐる人類学
的研究』ナカニシヤ出版, pp.53-91.
- 竹内潔(2001)「分かちあう世界——アフリカ熱帯森
林の狩猟採集民アカの分配」小馬徹編『くら
しの文化人類学 第5巻 カネと人生』雄山閣,
pp.24-52.

b) 英語論文

- Behrens, C. A. (1986) “The Cultural Ecology of
Dietary Change Accompanying Changing
Activity Patterns among the Shipibo.”
Human Ecology 14 (4), pp.367-396.
- Behrens, C. A. (1992) “Labor Specialization and the
Formation of Markets for Food in a Shipibo
Subsistence Economy.” *Human Ecology* 20 (4),
pp.435-460.
- Bergman, R. W. (1980) *Amazon Economics:
The Simplicity of Shipibo Indian Wealth*,
Michigan, Michigan University Microfilms
International.
- Hern, M. W. (1992) “Shipibo Polygyny and
Patrilocality.” *American Ethnologist* 119 (3),
pp.501-521.
- Ohashi, M, T. Meguro, M. Tanaka, M. Inoue (2011)
“Current Banana Distribution in the Peruvian
Amazon Basin, with Attention to the Notion
of “Aquinkin” in Shipibo Society.” *Tropics*
20 (1), pp.25-40.
- Ohashi, M. (2015) “Whom to Share With? Dynamics
to the Food Sharing System of the Shipibo in
the Peruvian Amazon”, in M. Tanaka and M.
Inoue (eds.) *Collaborative Governance of
Forest toward Sustainable forest Resource
Utilization*, Tokyo, University of Tokyo
Press, pp. 223-245.